



「えん」

東京薬科大学の森岡和大先生からバトンを引き継ぎました、宇都宮大学の稲川です。森岡先生には学生時代から関東支部の若手の会でお世話になっております。学会の度に夜の街に繰り出し、遅い時間まで飲んで学会発表に突入するというのはコロナ前の常識、懐かしいものです。所属研究室外に同じ目標を持つ先輩がいたということは、アカデミックの世界で生きていくことを決意した理由のひとつです。まさに「えん(縁)」ですね。

さて、結婚式のスピーチではないですが、私たちの周りにはいろいろな「えん」があります。自分の周りにある「えん」を探してみたいと思います。

- ・「塩」分析化学を勉強する者にとって、塩の存在は切っても切り離せません。電離、活量、イオン強度、デバイ=ヒュッケル近似、イオン液体… 分析化学教育の初っ端から最先端の材料まで、この仕事をしていて「塩」を見ない日はないことでしょう。日常生活で「塩(しお)」を「えん」と読んだ日には白い目で見られることも、これぞ職業病。
- ・「炎」炎色反応や炎光光度法など、分析手法に「炎」を使うことは昔から使われています。最近の学生は炎色反応を高校で見たことが無いようで、学生実験で演示すると目をキラキラさせて喜びます。
- ・「鉛」電極やはんだの材料として使われてきましたが、最近では厄介者としてあまり使われなくなりました。金属イオンの定性分析においては第1属の金属として塩酸で沈殿させて熱水で溶解するという操作がありますね。学生は高校で覚えるようですが、実際に手を動かすのは大学の学生実験が初めてのようです。
- ・「宴」学務や学会の後に宴席は外せません。宴会ほど研究の話が進むことはありません(?)。リミッターが外れていれば、よい成果だけではなくうまくいかない実験の話もしやすくなります。学会の先生方もお優しいので、いいアイデアをいただいたり、装置を融通していただいたりなどと、具体的な話が進みます。もちろん、雑務が入ってくることはありますがお酒が入っているので問題なし。私たちもただお酒を飲んでいるわけではありません。そこはわかっていたいただきたい(誰に?)。
- ・「演」大学で仕事をしていると学生の前では先生という役回りを「えん(演)」じなければなりません。しかも「講義」と「研究室」での使い分けも必要です。さらに、「学務」「広報」「学会」「家庭」「趣味」「自治会」といった役回りもあるわけで、俳優も顔負けの演技能力が必要だと思っております。

他にも「えん」はたくさんありますが、すべてにおいて共通することは何でしょうか。「塩」「炎」「鉛」は化学の教授内容であります。いずれの「えん」においても「分析化学」という共通点を通じて「つながること」に違いありません。「縁」は言うまでもなく、私たちは化学の教授内容(「塩」「炎」「鉛」)を通じて学生と繋がり、人材育成や研究を行っています。「演」は常に相手ありきの行動です。相手のために私たちは様々な職務を「演」じるのです。そして、「宴」によって専門分野以外の研究者と繋がり、私たちの研究生活は豊かになるのです。

ちなみに、「縁」は人だけに当てはまるものではありません。Google Scholarを開くたびに現れる名言、皆様ご存じの「巨人の肩に立つ(standing on the shoulders of giants)」です。この表現は、まさに先人の研究成果が「縁」のようにつながることによって新しい研究成果が生まれるということではないでしょうか。論文や学会発表を通じて様々な研究成果が互いに結びつくことで、イノベーション創出の可能性は格段に上がります。学会はその縁を育むためのプラットフォームであり、その役割を果たすべく学会活動を盛り上げていかなければならないと思うわけです。人口減の現代社会において、学会、学術誌、年会・討論会の在り方をよく考え、「えん」に満ち溢れた学会へとなるよう微力ながら励む次第です。

さて、このリレーエッセイは2008年1号から続いており、まさに「えん(縁)」で成り立っている企画です。開始当初の記事を見てみると、その執筆者はなんと現在の上司である上原伸夫先生でした¹⁾。上原先生がごなたに渡したのか、それは筆者が修士課程時代に研究室でお世話になった火原彰秀先生(東京科学大学)でした²⁾。この一連の流れを上原先生にお話したところ、ニヤリとされておられました。16年たって宇都宮の地にリレーエッセイが戻ってきました。これも「えん(円)」ですね。

「円」から接線方向に「延」伸して、森岡先生から受け取ったバトンを産業技術総合研究所計量標準総合センターの中村圭介先生に渡したいと思います。中村先生も関東支部若手の会の「縁」で、学生時代は森岡先生や、中村先生が所属していた研究室の学生さんも含めて国内外で「宴」会をたくさんしました。工学博士でありながら、理学も農学も行ける「演」技派(?)研究者です。乞うご期待。

文 献

- 1) 上原伸夫: ぶんせき (Bunseki), 2008, 40.
- 2) 火原彰秀: ぶんせき (Bunseki), 2008, 88.

[宇都宮大学工学部 稲川 有徳]